

1427
1
95

幼児の教育

'96
1月号

家庭—保育所—幼稚園



風にのれ! アホウドリ

一時は絶滅したかと思われていたアホウドリ。20年近く鳥島に通い続け、その保護に力を傾けてきた著者が、美しい写真とともに道のりをつづった一冊です。デコイを使った引っ越し作戦などでよみがえりつつあるアホウドリの姿が親しみやすい語り口で紹介されます。

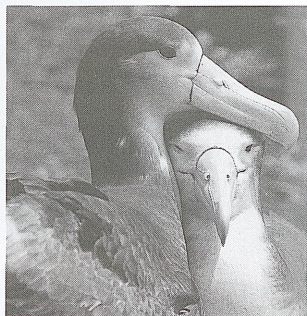


推薦

全国学校図書館
協議会選定図書

日本図書館協会選定図書

95年SLBC選定図書



長谷川 博・著

24×19cm・104頁・1,600円 (本体1,553円)

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第95卷 第1号



幼児の教育 目次

— 第九十五卷 第一号 —

© 1996
日本幼稚園協会

〈巻頭言〉生活感を育てる保育を……………関口はつ江……………(4)

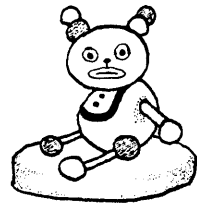
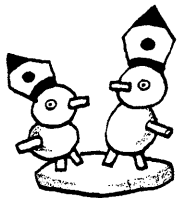
保育者が老いるとき……………津守 真……………(7)

M先生とKちゃんのこと……………佐木みどり……………(12)

「こどもテレホン相談」から(1)

おなかの赤ちゃんのことから子どもっぱい夫のことまで……………小島 直美……………(18)

動物行動の研究から(5) 食欲がそそられる理由……………小山 幸子……………(27)



第21回 O M E P (世界幼児保育・教育機構) 世界大会を終えて…小川 清美… (36)

震災後の子どもたち(4) 地震と絵本づくり……………箕浦 志保… (44)

ある日の育児日記から(6)……………佐藤 和代… (52)

差し出された十円玉……………永野むつみ… (53)

中国のむかしばなし『^{てい}丁ばあさんと^{ねん}「年」』……………近藤伊津子・編… (61)

表紙絵・いわむらかずお(「なにかありそうだ」)

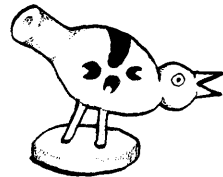
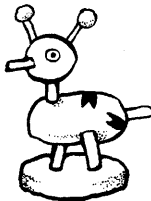
扉題字・津守 真

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・彌永たたえ(うつし絵の中のお正月)

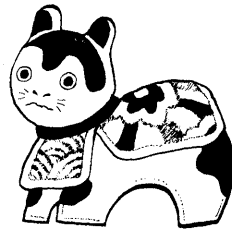
編集委員・田代 和美／榎田 正子・伊集院理子

編集部・仲 明子



生活感を 育てる保育を

関口 はつ江



最近わが国の将来について、「情報化社会」であることが強調されている。例えばはインターネットの発達で、居ながらにして、必要な情報が手に入り、選択、決定ができるようになる、わざわざ遠くまで出向いたり、周囲の状況を見て判断したり、よけいなことを見聞きしたり、折り合いを付けたりすることもない。向き合っているのは、機械の窓口を通して提示されている情報であり、反応は殆ど自分にとっての合理性に基づくので、目的

が明確な場合は、能率的であり、効率のよい生活ではある。

しかし、生活するとは、自分の目的達成のために一直線に行動することだけでは済まないことも多いはずである。回り道や、偶然の出来事から、思わぬ発見や結果が生まれたりする。予想を越えた様々な出会い、障害を乗り越える中で、視野が広がり、困難に対する抵抗力や自信がつく、世の中が見えてきて、生活することの面白さがわかってくる。将来に備えて情報操作能力、選択能力が大切であるとされているが、その前に、情報の実体、機械の窓の向こうに広がる、こんがらかった世界（精神的にも、物理的にも）を実感していなければ、生活の実体が伴わない断片的な情報の操作に終わってしまうであろう。

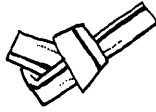
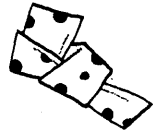
機械との会話が 많이 生活の中で、子ども達はこれから、どうやってここらからだを持つ自分について、自分と周りの物や人との関係について、その複雑なからくりを実感して行くのであろうか。

先日「集団降園は困る」という若い母親の意見を聞いた。幼稚園とすれば、全くのサービスタシとしてやっているんで、もし保育者が一定の場所まで子どもをまとめて送る必要がなくなれば、保育者達は楽になるので大喜びをすることである。少しでも親の負担を軽くしたい、同じ方向に帰る子ども同士の関係が深まるのではないか、異年齢の子同士の助け合いもある。担任外の保育者との触れ合いの機会にもなり、その子の意外な面が表れたり、発見もある。園としては大変でもやり続けてきたことである。「困る」という理由は、親が

園まで迎えにすれば、「クラスの子ども同士の家での遊びの約束ができる」ということである。年長のことでもあるし、子ども同士でも何とかならないものかと思う一方、集団降園の意義を説明しても、釈然としない母親の顔つきから、自分の観点からのみ物事を計ろうとする堅さに心が通じないもどかしさを感じさせられた。高学歴の母親にこうした傾向が強く見られるが、自分は正しいという自信からか、自分の思いが通らなかつた経験などはなかつたからであろうか。

都合のよいものを選ぶ、気に入らなければ断ればいいという時代になり、子育て支援に対して国が用意しようとしているメニューもどんどん多様になってきている現在、時代の流れには逆らえないが、こうした環境の中で人はどうなっていくのかを見極めながら、せめて幼稚園は、複雑で、わけのわからないことの中にも面白いこと、大事なことが沢山あること、自分や人や物事は決め付けてしまうことができないうことなど、しなやかで、柔らかい心を育てる保育でありたいと願っている。

(郡山女子大学短期大学部
郡山女子大学附属幼稚園)

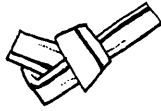


保育者が老いるとき

津守 真

数年前から、私の学校で、小さい子どもが私のことをジージと呼ぶ。だれがそう言わせているのでもない。ごく自然にそう言うのである。

私子どもと楽しく遊んでいるとき、実習生のお兄さんやお姉さんがあらわれると、その子はごくあっさりと私のそばを離れてしまう。子どもには若い動きと美しさが魅力なのだろう。私も子どもどきと同様の記憶があるので、若い人にゆだねて見ていると、なるほどと思わされる。新鮮なエネルギーのぶつかり合いが、活気ある保

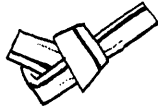


育の場を作り出している。それでも子どもが好んで私を選ぶときもある。それは子どもが危機にあるときや、落ち着きを求めているときのように思う。

毎日子どもと共に過ごす保育者の生活は、心身のエネルギーも時間もすべて子どもに与えているから、大変だけれども、子ども時代のたいせつな時と一緒に過ごしている実感とよろこびがある。子どもが親しみをもって自分の心の奥をあらさまに示すのはこのような保育者に対してである。親が信頼して語りかけるのもこのような保育者に対してである。それを受けて毎日考えながら保育することによって、保育者もまた人間的に成長するから、保育者の生活には何ともいえない真実の喜びが感じられるのである。それだけに、それには大いなる気力と体力を必要とする。

私自身、「古来稀なり」といわれた年齢を超え、他の社会的仕事も加わって、毎日同じ子どもと過ごす保育者の生活は不可能になっている。限られた日数、限られた時間を子どもと過ごすだけなのだが、そういうときに、子どもと一緒にいるのは、短い時間でも貴重に感じられる。

このことは、老年期の時間感覚とも関係があるように思う。現代は長寿社会であるけれども、若いときに比べれば、有限な時間を意識せざるを得ない。それを自覚すると、自分自身の生活でも、将来への効果とは関係なしに、現在のひとときを大切に思



う。この点で、子どもが生きている時間感覚に近くなるのではなからうか。

継続する保育の喜びとは異なっても、一回毎の保育の楽しみはまだ残されている。毎日つづく保育の中では、ときとして見失われる保育の場の一回性は、老年期に一層認識される。

保育は身体を通しての仕事である。

年をとると走ったりおぶったりするのが困難になるのも自然なことである。しかし子どもとかわることによって身体が立ち直るといっても保育の事実である。少しぐらい身体の調子が悪いときでも、子どもたちの中に入ると癒されることがあるのは保育者がよく知っている。人の身体の状態には個人差が大きいから、一概に言うことはできないが、心身に相関性があることは、若年者も老年者も同じだろう。私の学校には、発作を起こす子どもが何人もいるが、それも本人の生活の仕方や、気持ちの持ち方によって変わるのを見ていると、老年者にも同じことがあるのだろうと思う。

老年になると、若い人から、こんな子どもはどのように保育したらいいのでしょうかと尋ねられることが多くなる。しかし、それは経験を積んだ老年の保育者だからと言って答えられる質問ではない。「こんな子ども」という固定した特性が子どもに貼りついているわけではない。関係の中で子どもは違う姿を見せる。子どもとの出会い



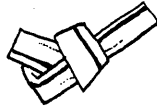
方、見方の根本を常に考え直し修練することは、年齢を問わず保育者の課題である。

秋の爽やかな一日、五歳の男児がジョウロに水を入れて、門と砂場との間を走って往復していた。地面に水のあとがついている。それから、容器に水を入れることを私に頼み、その水を砂場の乾いた所にこぼす。水が砂に吸収されてゆくのを見つと見ている。それは私にも面白く、子どもの頼みに答えて何十度も私は水を運んだ。

こうしてゆっくりと過ごしていた最中に、その子は私の手を引いて、突然私の左手を噛んだ。私が思わず痛いというとき、ことばを話さないその子は、何か口の中で言いながら庭を歩き、右手も噛もうとした。庭の遊具に上るのにも私に上半身をあずけて足だけのぼらせる。私にはなかなか重くて苦勞である。それを何度もやった。やりながら私はふとその朝のことに気が付いた。

その子は、庭の側溝の鉄の格子の蓋をあけて欲しかった。私は最近毎日保育に出ている人ではないので、担任の先生の顔を見て、あけてもいいかと尋ねた。担任は、しばらく掃除をしていないからと言ったので、私は格子をあける真似だけしてあかないと言った。こういうことは子どもにはすぐに分かるのだと思う。その子は、私が自分で判断しないで他人にたずねて決めたのを見ていた。

この子とは私は最近も何度かつきあいがある。先週は、この子が満足するまで絵の



具で戸棚を塗った。この子はそんなことはさせてもらえなかったようだった。それも私自身の判断ではなくて、他人がいいと言ったからそうしたのでらう、なんだインチキだったのじゃないかとこの子は言っているように思った。それで怒って私の手を噛んだのだと。いや、「怒って」と表現するのは適切ではない。この子は、あの格子の場面をめぐる私とのが頭から離れず、その問題が解決していなかった。それで私に苦勞なことをさせていたのだらう。そのことに気が付いて私はこの子に、もし格子をあけたいならあけてあげると何度も言ったが、子どもはもはや聞いていないのかどうかも分からなかった。

そのことよりも私との関係の方が彼には重要だった。私はその子に本気に答えることに一生懸命になった。この日、この子は何度も私の手を引きに来て、私に親しみを寄せた。

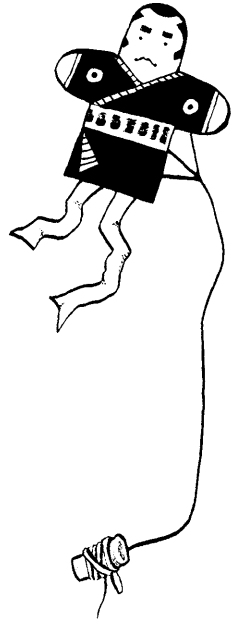
帰りがけ、私は母親にこの日の私の体験を話した。母は、そうなんです。この間も同じようなことがあったんですと家庭でのできごとを話し始めた。

この日の夕方、担任の先生が、溝の重い格子を持ち上げて、溝の掃除をしていたのは特別に印象的であった。

(愛育養護学校)

M先生と Kちゃんのこと

佐木 みどり



はじめに

私が幼児教育に携わり始めて約二十年が過ぎました。

幼児教育を始めた頃は、保育者として子どもだけを見つめ、子どもについてだけ考えていた数年でし

たが、後の十数年は、保育者を育てることを考えてきたように思います。

今の私は、子どもの育ちや姿を見ながら、その子にかかわる保育者を見えています。保育者が子どものことで困ったり悩んだりしている時に保育者と一緒

に考え、保育者が気にしている子どもを観ながら、その保育者の様子もまた観ている自分に気が付かされます。

Kちゃんのこと

三年保育年少児を担任しているM先生の悩みは、Kちゃんのことでした。

Kちゃんは、祖父、両親、妹がいる三月生まれの三歳の男児です。入園した当初は当園をいやがることもなく比較的順調な様子でした。しかし、側にいて遊んでいる他の子どもを急にひっかいたり、たたいたり、おもちゃを取り上げてしまったりする姿が見られました。そして、何かが気に入らないと隠れてしまうのです。隠れ方も中途半端ではないのです。最初の頃はKちゃんがいなくなると、一人で家に帰ってしまったのかとか、フェンスをよじ登って川に落ちたのではないかとか（園の前に四メートル

ぐらいの川があります）、全職員で必死に探したこともありました。その時は、倉庫の中の棚の陰に隠れていたのです。見付けた時は本当にホッとしました。見付けられたKちゃんが、嬉しそうにニコニコしていたのが印象的でした。それから一か月に一度程度十月頃まで、Kちゃんのかくれんぼが続きました。大人が考えも付かない遊戯室のカーテンとカーテンの間、お手拭きタオル掛けのタオルの中に、小さくまるくうずくまっているKちゃんを見付けるのは、なかなか簡単にはいきませんでした。最初のように川に落ちたとか、園外に出ていったと、まったとかいうような心配はしなくなりましたが、やはり必死で探し回ることが数回重まりました。そして、もう一方で、Kちゃんの乱暴な行動は治まることなくエスカレートしていくように見えました。先生達は、「Kちゃんは隠れるから困った」「どうしたら、お友達に手を出さないようになるのだから

うか?」「Kちゃんは、……」「Kちゃんは……」
と、その行動の現象面だけでKちゃんをとらえた言葉が聞かれるようになっていきました。

M先生のこと

Kちゃんのこと、一番困っていたのは担任保育者のM先生でした。Kちゃんが手を出した子どものお母さんから苦情が出たり、M先生がみんなに絵本を読んでいる時に邪魔をしたり、おもちゃを壊したりするKちゃんにM先生はほとほと手を焼いていました。「彼が休むとクラスが落ち着くんです」と何気なく言ったM先生の言葉が耳に残っています。

短大を卒業して本園に就職して二年目のM先生にとって、Kちゃんはどうしたらよいのか分からない子でした。

M先生が捉えたKちゃんの姿は、その当時のM先生の四月二十日の記録で読み取ることが出来ます。

元気に挨拶し登園してくる。すぐにタオルを掛ける。そして、すぐ近くにいたM夫をたたきはじめる。

次に、だいち組の保育室(隣のクラス)に入る。男児が積み木を積んでいるところに行つて、一緒に積み始める。男児の方は、K夫が来たことは気にしないで一緒に積んでいる。しかし、K夫は急に積み木を男児の方に倒す。



この記録はKちゃんの行動の経過説明に終わっています。M先生が、Kちゃんの行動を気にしているのが分かりますが、ここには、Kちゃんの表情や場の状況、男児がKちゃんにどのようにかかわったかというところまでM先生の関心が向いていません。Kちゃんだけがスポットライトで浮かび上がったように、その行動のみに関心がいらっています。

Kちゃんの本当の姿が見えているのか不安が残りました。しかし、このことは幼稚園の先生になって二年目の先生であればよくあることです。

みんなで話し合うこと

私は、先生達が気にしている子を一緒に考えるために四年程前からビデオ撮影をしています。一週間に一日だけ一人の子どもを、その時の状況と遊びや行動の様子と流れ、人とのかわりなどによって三十分位、百二十分位の幅で撮影し、撮影後簡単な

フィールドノートを付けています。

このビデオを先生達と一緒に見ながら、話し合いの時を持ちます。

Kちゃんのビデオも撮りました。そして、十月十四日のビデオについては、M先生と二人で見え話し合いをし、その後で全保育者でみて話し合うことをしました。ビデオの内容は大体次の通りです。

保育室の外にいるM先生の「お片づけだよ」という呼びかけでひかり組(Kちゃんはひかり組です)の保育室にいたKちゃんもお片づけを始めます。時々M先生の方をちらちらと見ながら彼なりに二生懸命片づけをしています。

保育室の中は乱雑に散らかっており、ままごとのおもちゃも畳の上に落ちています。その時知らずにKちゃんはままごと用のお茶碗を踏んで割ってしまいました。Kちゃんはしまったというような表情

をしながらその場に立ちつくし壊れたお茶碗を見ていると、そこにM先生が通りがかり、「何で割ったの、ちゃんと下を向いて歩かなくてはいけないじゃないの」とKちゃんがわざとやったというようなニュアンスで言う。周りの子ども達も「Kちゃんがやった」と口々に言う。

このビデオ撮影後三十分位して、M先生が「Kちゃんがいません」と職員室に飛び込んで来ました。フリーの保育者と一緒に探し回りながら、以前お手拭き掛けの中にすくんでいたことを思い出して行ってみるとやはりそこに隠れていました。見付けられた後もKちゃんは保育室に帰るのをいやがり職員室に少しの間いて、遊んでいました。

M先生とこの日の保育後に撮ったビデオと一緒に見ました。M先生は、お茶碗を割ったその前のKちゃんの様子を見て、意外そうに「わざとじゃな

かったんだ」と言い、随分苦しそうな表情をしていました。私も、ビデオを撮りながらその場でM先生に説明しなかったことがよいことだったのか、考えさせられました。後日、全保育者でこのビデオを見ながら話し合ったときに、M先生の言葉の中に「Kちゃんはあのときどんな思いだったのか」とか、「私が決めつけて接したから、Kちゃんは隠れたのかもしれない」というように、Kちゃんの行動だけでなく内面を読み取ろうとする意志が見えてきました。M先生は、茶碗を割ったKちゃんを決めつけて接した自分を反省する中で、決めつけた自分と、決めつけられたKちゃんの気持ちを振り返り、Kちゃんの内面を見つめていかなかった自分に気が付いていったのでしょう。

他の保育者達も困ったKちゃんではなく、「先生の方をちらちら見て片付けているのはM先生に褒められたい気持ちがあるんだね。可愛い所あるね」他の子

にあんな嬉しそうな顔して話しかけてる。誰かと遊びたいけど、どのようにかかわったらよいのか分からないのだと思う」「Kちゃんって車で遊ぶのが好きなんだね。Kちゃんの遊びたい遊びをもっと認めてやるといいのかもしれない」などという声が聞けました。その場の雰囲気は困ったKちゃんをどうするのかではなく、ビデオで観た自分の知らないKちゃんに驚き、いろいろな姿のKちゃんについて話し合い、その思いを推し量るといようなものでした。

まとめ

Kちゃんは、十一月頃から隠れることをしなくなっていきました。そして、徐々に他の子どもをひっかいたり、かみついたりすることもなくなり、他の子ども達もKちゃんを、乱暴な子と決めつけることが少なくなっていきました。

Kちゃんの問題を、「こうすればいいのよ」「この

ことはこうなのよ」と、私や他の先輩の保育者が言ったとしても、M先生が言葉の上では分かたつたつもりになったとしても、問題は解決されなかったと思います。Kちゃんのことをみんなで話し合い、共に考え、M先生の悩みに共鳴していったことで、M先生は自分を振り返り、Kちゃんの行動だけでなく内面をみつめることの大切さに気付くことができたのです。そして、Kちゃんへのかかわり方を変えていったことで、Kちゃんの姿が変わっていったのでしよう。

このエピソードから、保育者の具体的な問題を一緒に考え、寄り添う保育者集団の在り様で、保育者が自分自身で問題を解決したり、自分の今の保育の枠組みをはずしたりするきっかけになるということと、保育者が変われば、子どもも変わっていくというところを改めて確認することができました。

(岐阜県 学校法人佐木学園 揖斐幼稚園)

おなかの赤ちゃんのことから 子どもつばい夫のことまで

小島 直美

はじめに

年末年始の長いお休みのあけた一月四日、今年もより良き相談員を目指して、と心ひきしめて受話器の前に座るとこんな電話がかかってきました。

「いつもは何かあったらテレホン相談、と思ってい

られるが、年末年始はお休みと思うだけで不安になってしまふ。お正月は親戚との付きあいもありとても大変だった」と子育ての不安が強く自分自身の対人関係の悩みも多い母親がこの電話との絆を語ってくれました。又、ある年の初めには高校三年生の男子から「友だちは進路がきちんと決まっているの

に自分は将来の道としてこれと言ったものがない。
この先、「いっばしの男」になれるのか……」と思春期の自分探しの不安を訴えていながら新春にふさわしいさわやかさをも感じ、電話がありました。

ここ横須賀児童相談所の「こどもテレホン相談」には、0歳から、いえ実際は妊娠中の赤ちゃんの事から思春期の悩みまで、そしてそれ以降のおとなになってもいつまでも「育っていきたい」人々の様々な相談が寄せられます。電話相談員になって四年、この度六回にわたって電話相談について紙面を通してみなさまと考える機会をいただきました。今回は相談の様子のアウトラインをご紹介します。次回からはテーマを絞って深く考えていこうと思っています。

時代の変遷の中での電話相談

神奈川県内の五つの児童相談所（横浜、川崎を除

き、中央児童相談所、横須賀、小田原、相模原、厚木）では昭和四十七年に中央児童相談所が、他は五十年から、専用の回線で専任の相談員を置いて平日の午前九時から午後四時までの電話相談を開設しました。さらに平成元年から中央児童相談所では「子ども・家庭一一〇番」と名を改め、平日は午後八時まで土、日、祭日も午後五時までと時間を延長して受けつけています。

電話相談は、従来の来所による面接相談、援助に加えて、いつでもどこからでも気軽にしかも名前を知られず顔も合わせずに相談できる方法として多くの方に利用されてきました。

開設当初はコインロッカー・ベビー等の言葉が生まれた「乳幼児受難の時代」で、電話相談も子育て支援が狙いとされてきました。その後、時代の変遷とともに思春期の心理的問題や性に関する相談が増え、最近では不登校、いじめ、虐待等と深刻な相談も増加の傾向にあります。

継続相談の多い児童本人からの相談

では具体的に「誰から」「誰の事を」「どんな事」で「相談があるのかを図をもとにご紹介します。

平成六年度は全部で九百件の相談がありました（全受信数二一八一件、無言電話一六五件、悪戯電話一一六件）。九百件の内「児童本人から」が六十三・四%、「親族から」が三十五%です（図1）。電話相談は一回の相談を一件とカウントし、一人の人が何回か相談してきてもそれぞれ一件として記録されます。母親等からの子どもに関する相談の場合、経過を見ながら継続していく事もあります。一方、子ども自身、特に中高生以上の「何か生き方のうまくいかなさ」のような相談の場合には、その時々不安を受けとめて、一緒に考えていく、言うならば日常を「伴走」していくような継続相談になる事が多くあります。このような相談を十八歳を過ぎたからと即お断わりする事はできず、実際には大学生やお

「こどもテレホン相談」受信状況（図1～3）

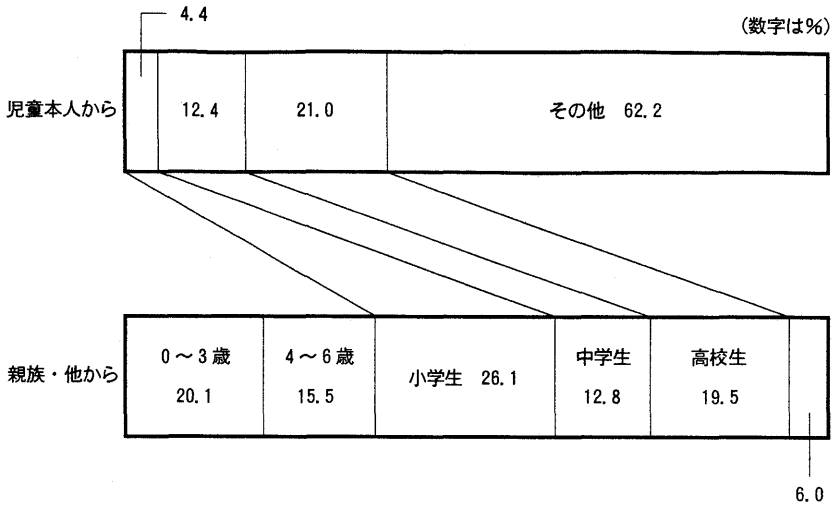
全相談件数 900件
平成6年度 横須賀児童相談所

図1 相談者の内訳

児童本人から 63.4%	親族から 35.0%
--------------	------------

その他から 1.6%

図2 相談対象者の内訳



となの人の継続相談の多さが図の割合になっているのです。

相談対象は小さな子どもからおとなまで

相談の対象になる年齢（図2）も、児童本人からは小学校高学年以上がほとんどです。以前「おたまじゃくしは何を食べるんですか」と四歳の幼児から電話があったのが当所の最年少です。

親族からの相談は小さな子どもから大きな子どものことまで色々です。図にはありませんが母親からの相談が九割近くを占めます。最近の特長は、語尾を強く上げる話し方をする世代が母親となって電話相談にも登場し始めた事です。もちろん小さな我が子の事での悩みが語られるわけですが、その背景に母親自身の社会的未熟さの「子ども部分」が見えるのです。母親の育ちをも応援・サポートする相談員である必要を強く感じています。

相談の様々な内容

相談の内容は本当に様々な範囲に広がっています。児童相談所では来所相談の主訴によって分類がなされています。図3はその分類にはほぼ準じて種別ごとの全体に対する割合を示しています。以下具体的な内容を相談種別ごとに紹介していききたいと思います。

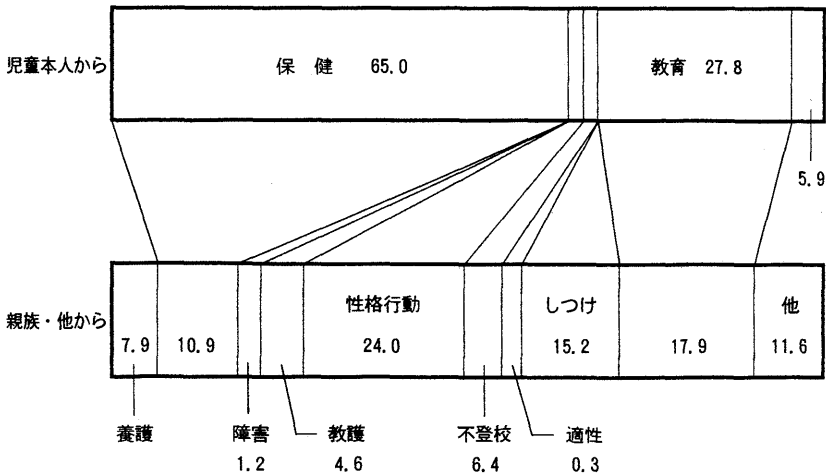
養護相談

来所相談では数の多い相談です。親の死亡、離婚、再婚、入院等様々な理由で育てられなくなった場合。また育ててはいても虐待してしまったり等の相談です。

電話相談では、子どもを預けたい、と来所相談への窓口的役割を果たす事の他、最近では虐待の相談が増えています。「近所で親の叱る声と子どもの泣き叫ぶ声が絶えない。どうしたらいいか」と第三者

図3 相談内容の内訳

(数字は%)



からの相談もありますが、母親自身から「どうしてもイライラを子どもにぶつけてしまう。夜眠った顔を見るとあーなんて事してしまったんだろう、明日こそ決して手をあげまいと思うのに……」と苦悩が語られます。話を聴くと、マンションの一室で相談相手もなく子どもとの向きあい子ども行動に不安を募らせている母親のつらさが伝わってきます。子育てはひとりりで背負わなくていいのよ、助けを求められて良かったね、と母親の行動のプラス面を支援、これからできる事を一緒に考えていきます。聞いてもらって気持ちが軽くなった、話せる人ができてよかったと喜ぶ人、保育園に入れてみようか、と積極的解決に向けて決意を語る人。今の膠着状態に少し風穴があき、母親の心に余裕ができる光が見えてきます。

保健相談

急の発熱の不安、赤ちゃんがハイハイして壁に頭をぶつけた、熱いコーヒーを手にかけてしまった、

と怪我や病気の心配。最近おっぱいの飲みが少なくなって、と乳幼児の発達に関する事。包茎だと思っけど、直るんですか」と思春期の身体発達の質問。他人の視線が気になる、自分の臭いが人に迷惑をかけて嫌われている、何もかも嫌になって昨日手首を切ってしまった等、心に苦しさを抱えた精神保健に関する相談。特にこの種の相談は児童本人からが圧倒的多数を占めます。精神科に受診して薬は飲んでいるが話を聞いてほしいという人も多くいます。

心身障害相談

「二歳になったが言葉が遅いのですが」という母親の不安がたまに聞かれます。様子を聞いて日常生活のアドバイスをしますが、種々の制度的な援助を必要とする場合は来所による相談をすすめます。

教護相談

夜遅くまで街をふらつき時に外泊もある高校生の女子。家の財布から頻繁にお金を持ちだしている中学生。友だちと遊び感覚で万引をしてしまった小学

五年生。びっくりして相談してくる母親の問題解決への意欲を支え、背景にある事等を話しあっています。

性格行動相談

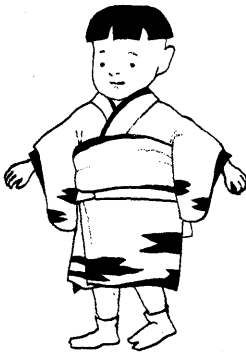
子どもはよく、母親を「困らせる」行動をする事があります。反抗的だったり、我儘だったり、感情的に不安定になったり。少し重くなるとチックや抜毛や拒食。そして、これらと関連して学校に行き渋る等がこの性格行動の相談になります。親からの相談では一番多い割合を占めています。

親のかかわり方の変化が子どもの状態を改善していける状況の場合、電話相談による援助も効果をあげられますが、児童本人に対するプレイセラピー等の治療が望まれる時は来所相談への橋渡しの役割をします。

不登校相談

息子がいるから、といつも公衆電話から相談してくる母親がいました。家に閉じこもったままの子ど

も自身から電話がある事もあります。「校門まで行ったけど足がすくんでやっぱり帰ってきた」と話す中学生。「こんなに自分の事話せて聞いてもらえた事は始めて」と声のトーンが明るくなった高校生、きっと自分の中に力をつけてくれたと思っています。



適性相談

件数は少しですが進学や進路についての相談があります。受験する高校を決める秋頃、中学三年生の母親から「子どもは〇〇高校を受けたいと言うし、先生は△△高校をすすめるし……」との迷いの相談が恒例のようにあります。

しつけ相談

就学前の幼児の相談はほとんどここにはいりません。夜驚、指しゃぶり、チック、性器いじり、排泄等々、子育ての中での母親の心配を子どもの発達をふまえながら共に話しあい、解決の糸口を探っていきます。

公園デビューという言葉も聞かれるこの頃、子どもが遊び友だちの中に入っていく過程で、母親も子どもをどう遊ばせたらいいか、他の母親たちとどう付きあっていったらいいか、が深刻な悩みになっています。おもちゃの取りっこ、おもちゃを貸せない、すぐ譲ってしまう、砂をかけられた、友だちに

乱暴する、仲間はずれにあうなどです。初めて他人と付きあうのだから最初からうまくいかなくても当り前、だんだん上手になれるといいね、とまず母親の緊張を解いて、母親がゆとりを持って子どもを支えられることを目指します。

登園渋りの相談も少しずつ増えています。朝毎に泣き叫ぶ子を通園バスに押しこめる母親の切なさ、不安、迷い、三歳になったばかりでしかも赤ちゃんがつい最近生まれたという子。ひとりっ子で今まで友だちともあまり遊んだ事がないという子。お弁当の時間がどうしても嫌という子。仲間はずれになっていじめられているらしい子。それぞれの背景を検討し、まず何ができるか、幼稚園側とはどう話しあっているか、やはり無理はせずに親が子どもの育ちを信じて支えていけるように援助しています。

教育相談

宿題をやっているけど分数の計算がわからない。つばめの子を拾ったけどどうやって育てたらいい？

りんごを切ると、色が変わるのはどうして？ 世界の七不思議って何ですか？ と、ラジオの「子ども電話相談」のような所と、思っている質問には苦勞させられます。一緒に問題を解いたり、問いあわせ先を紹介したり、図書館等で調べてみてごらん、とすすめたりします。

学校内で起きる問題、先生とうまくいかない、先生の体罰、時に怒りを含んでの訴えが寄せられます。

友だちとの付き合い方の相談は児童本人からかかってきます。女の子のグループ内のゴタゴタ。好きな男の子に「告白」したい等々。相談員も遠い青春をふと思い出すひとときです。

男子からは性に関する悩みが語られます。情報は沢山あって接していても自らの性には不安が強い。名乗らず顔もあわせずに話せる電話相談は安心して利用できる相談形態なのでしょう。

その他の相談

今までの分類にはいらない内容の相談です。離婚

の際の子の親権に関する相談。同居しているおばあちゃんごとでも口うるさくて……と夏休みに中学生の女子から相談があったこともありました。夫が幼児性が強いので「子どもテレホン相談」ならどうしたらよいかわかるかと思つて、と奥様から珍しい電話がかかった事もあります。

*

以上電話相談のアウトラインをエピソードを交えてご紹介しました。電話相談員はこんな事に日々真剣に向きあっています。言葉、声、息づかい、無言の間にも耳だけでなく心を傾けて聴く努力をしています。相談者を受けとめ、共感的理解を返していくことで、相談者自身の気づきや問題解決への力が生まれてきます。きょうも電話相談の中で、子どもの反抗的態度を自立ととらえ見守つていこうと決意できたお母さんがいました。

(神奈川県横須賀児童相談所電話相談員)

食欲がそそられる理由^{わけ}

小山 幸子

前にテレビで時々見かけたコマーシャルに、とてもおもしろいのがあった。場面はタクシーの中だ。画面は、タクシー運転手を前から映す形で、後部座席に向けて映されている。お客さんが乗ってくるところでコマーシャルは始まるのだが、タクシー運転手は二人連れのそのお客さんに向かって、「お客さんぎょうざ食ってきたでしょ」と語尾ののびた感じで言う。関西弁だ。それに対してお客の方は見栄

を張ってか「ステーキや」と言い返すのだ。「ぎょうざなんだけどなー」「いやステーキやて」という調子で、このやりとりを何度か性懲りもなく繰り返すのだが、この見栄の張り方とやりとりが妙におかしくて、何のコマーシャルだかは忘れてしまったのにやりとりだけはいまだに耳に残っている。

このコマーシャルの中の運転手は、あまりお客の匂いに食欲をそそられたふうには見えなかった

が、日常生活では匂いに食欲をそえられることがよくある。道を歩いていたら良い匂いがした時や、人が何かを食べているのを見た時などだ。先のコマースシャルの場合にはこのどちらでもなくて、食事をした人に食べた物の匂いがついている場合だ。この場合には、食欲をそえられることもあるかもしれないが、おもしろいことに「臭い」という表現がされることが多い気がする。もしそうだとすると、これは、食べたものの匂いが残っている場合はあまり食欲をそえないからなのか、あるいは後にまで残るほどに強烈な匂いのものを食べることが「品がない」等のイメージを喚起するからなのか、どちらだろうか。見栄を張って否定したコマースシャルの人物のことを考えると後者の可能性が高いように思うのだが、いかがだろう。

人間の場合には、このように食べたものの匂いが残っていると、イメージが否定的な場合もあるが、

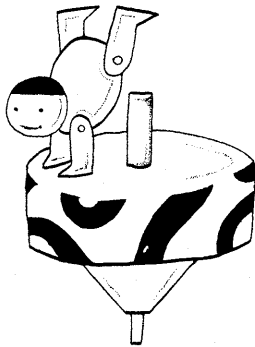
ネズミでは、「品がない」という余計な観念が当然ながらそもそもない（と思う）。そして、そのおかげか、こういう場合でももつと素直に食欲がそえられることがわかっている。そのうえ、何がその食欲をそえるものになっているかまで調べたおもしろい研究がある。

やり方は明解だ。まず、ラットを二匹ずつで飼う。片方のラットのことはデモンストレーションラット、もう片方のラットのことはオブザーバーラットと呼ぶ。それぞれの役割は、デモンストレーションラットが匂いのする餌を食べてきてぶんぶんと匂いを漂わせる役、オブザーバーラットがその匂いを嗅がされて食欲をそられたかどうかを調べられる役だ。

実験では、まず、そもそも食欲がそられるかどうか確かめられた。二匹で飼っているラットのうち、デモンストレーションラットの方を別ケージに

分けて一日餌を抜いておく。おなかをすかせて、匂いつきの餌をよく食べるようにするためだ。そして、三十分間、問題の匂いつきの餌を食べさせる。三十分と言えば満腹するまで食べるだけの時間は充分にある。この実験で匂いつきの餌というのは、ネズミ用の普通の固形飼料を粉末にしたものにココアかシナモンの粉を混ぜたものだ。ネズミによってどちらの匂いがついている餌かはランダムに変えてある。また、ココアもシナモンも、もともとネズミにとって特に好みも忌避もされないものだということは事前に調べられている。もともと好まれたり忌避されるものであれば、後でオプザーバーラットの反応を調べた時にもともの好みや忌避が影響してしまいうので、匂いを嗅がされた影響を正確に調べることができない。三十分後、デモンストレーションラットは元のケージに戻されて、十五分間オプザーバーラットといっしょにされる。

問題は、この後だ。ココアの匂いのついた餌とシナモンの匂いのついた餌の二種類が置かれたケージにオプザーバーラットを入れて自由に食べさせるのだ。さてそこでオプザーバーラットは、どちらの餌をどのくらい食べただろうか。もともとどちらに対



しても特に好みも忌避もないことはわかっているから、もしデモンストレーションラットが食べさせられてきた餌と同じ餌をより多く食べたとしたら、食欲をそそられてしまったということになるだろう。

結果は歴然としていた。二種類の餌を好きなように選んで良いにもかかわらず、デモンストレーションラットの食べてきた方の匂いのついた餌と同じ餌ばかりをとることもたくさんオプザーバーラットは食べたのだ。明らかに、直前に嗅いだ匂いに食欲をそそられてしまったらしい。

何が食欲をそそるのか

実験はここから本格化する。何が食欲をそそる役割を果たしているのか、原因究明の段階にはいるのだ。原因究明は、このデモンストレーションラットとオプザーバーラットとを十五分間いっしょにする

ときのやり方を工夫することでおこなわれた。例えば、もしいっしょにした時の直接的な相互作用が食欲をそそののに重要なならば、オプザーバーラットといっしょにする時に金網越しにしたり、デモンストレーションラットに麻醉をかけていっしょにすると食欲をそそることはなはずだ。けれども、どちらの場合にも、実にはっきりと食欲はそそられた。そして、ガラス越しにしたり、オプザーバーラットの嗅覚を除去してしまうと、デモンストレーションラットといっしょにしても食欲はそそられなかった。ということは、匂いを嗅ぐことができれば相互作用がなくても食欲はそそられて、匂いを嗅ぐことができなければそそられないわけだ。ならば、ある匂いを嗅ぐと、その後で実物を目の前にした時に食べたくなるものなのか、というところでもないらしい。人形に匂いつきの餌を塗って嗅がせてみると、この場合には食欲はそそられなかったのだ。つまり、ただ事前に匂いを嗅がされただけでは食欲はそそられないわけで、冒頭で述べ

た何種類かの例の中の良い匂いがすると食欲がそ
そられることがあるという例とは違うことがわか
る。また、デモンストレーションラットが餌を食べ
ていることも食欲をそらせるのに必ずしも必要で
はなく、食べさせずにただ麻醉をして口のまわり
に餌を塗ってもオブザーバーラットの食欲をそそ
ることはできるという。胃の中にはいって消化され
ている、あるいは消化されかかっているものに特有
の匂いが何かあるわけではないことをこれは意味し
ている。

では、いったい何が食欲をそせるのか。

この答えはとても意外なものだった。鼻腔から採
取した呼吸を分析して、呼吸に特有の物質が非常
に微量ながら検出されたのだ。そして、この物質と餌
の匂いとを両方一度に嗅ぐと食欲がそえられるら
しい。その証拠に、人形に匂いつきの餌とこの物質を
つけてオブザーバーラットに嗅がせると、人形につ

けてあったにもかかわらず食欲をそられたとい
う。

食べ物の匂いと呼吸に特有のこの物質の微妙な取
り合わせが食欲をそそっていたという何とも不可思
議な話だ。そして、なぜ不可思議な感じがするの
かと考えてみると、人間の場合には「臭い」と言われ
るものになりやすい「息」が食欲をそせるのに不可
欠だという結末がとても奇異に感じさせている気が
する。これはネズミに特有の現象なのだろうか。そ
れとも、人間にもかつてはそのような現象があつた
のだろうか。もしそうならば、これは、人間が文化
によって失いつつある生き物としての断面のひとつ
なのだろうか。

人間の場合、確かに匂いは、他の生き物とちがっ
て、文化との関わりによって独特の存在意味を持
っている気がする。哺乳動物の場合には、匂いがコ
ミュニケーションにとって重要な役割を果たしてい

るが、この役割は人間では嗅覚の退化によって大きく後退している。

ほかの動物では、情報交換に重要な役割を果たす匂い物質が体から分泌されていることは昆虫で知られはじめ、哺乳動物でも知られるようになってきた。身近な例ではイヌが道沿いに排尿したり、ネコが家のまわりで放尿したりするのは彼らの情報交換が匂いによってかなりおこなわれているからだ。道で出会った時におたがいのお尻の匂いを嗅ぎ合うのもそうだ。フェロモンと呼ばれる匂い物質の分泌箇所のひとつに生殖部位が含まれることが多く、そのためにお尻の匂いを嗅ぎ合うことは多い。また、尿の排泄部位の近くに匂い物質の分泌箇所があることが多く、尿の中に匂い物質が混入される種があるのだ。人間の場合にも、脇の下などは代表的な匂い物質分泌箇所だが、人間の場合にはおもしろいことにこれが腋臭として忌み嫌われ、腋臭対策用の医薬品

がいろいろ販売されている。これも文化の賜物だろう。そして、さらにおもしろいことに、いわゆる香水の中には他の種類の動物の匂い物質が原料となっているものがある。人間の文化では、自身の匂い物質を何とか排斥しようとしながら、他の種の匂い物質を後生大事に体につけることがエレガンスにおこなわれているわけだ。そう考えると、人間は、ずいぶん不思議な生き物のように思えてならない。

匂いを情報交換に利用する動物では、情報交換に利用する匂いを自分で生産するだけでなく、ラットの実験の例に見られるように口臭と匂いの物との組み合わせで情報の授受がおこなわれることもある。これに対して、言語という情報手段を発達させ、それを媒体として巨大な文明を発展させた人間は、匂いの本来的な利用法を失って、文化の中で本来の形とは非常に異なる形で匂いの役割を作り上げているのかもしれない。

匂いの選択的利用

ところで、先ほどのネズミの実験をおこなったガレフというカナダの研究者は、食欲をそそる呼気内の物質を解明してから、ネズミがこのような匂いを情報として利用するかどうかについての研究もさらにおこなっている。人間の場合ならば例えば、私たち道歩いているときに、向こうから見慣れた紙包みを手をぶら下げた人が来たとする。そうすると、私たちは、その人がその包みを持っていることから、今日はその店が開いているのだと推測することがある。ネズミにも、例えば、他のネズミが何かの匂いをつけていることから、その匂いの物が手に入る可能性を情報として得ることができるのだろうか。

この問題を考えるのに、ガレフは実にうまい方法を使った。三方向に枝分かれた迷路を考案したの

だ。枝分かれた先には三種類の匂いのついた餌がそれぞれ置かれている。そして、それぞれの匂いのついた餌がどの通路の先に置かれているかは実験中まったく変化しない。変化するのは、どの通路が先端まで行けるかという点だ。通路の先は分岐点からは見えないようにL字型に曲がっている。そして、曲がった先には、餌の手前に扉があり、日によって開いている扉が変化するのだ。だから、ネズミは毎日通路を走らされても、日によって開いている扉がランダムに変化するの、毎日の一試行目にはどうしても何の手がかかりもなしに、ランダムに通る通路を選ばざるを得ない。最初



の試行で運良く餌にありつける通路を選択できる確率は三分の一だ。へたすると二試行目にも開いている通路を選べない可能性もある。けれども、一度開いている通路を選択できれば、少なくともその日は後の試行もずっとその通路を選択していれば餌が食べられることになる。

このやり方で、ネズミにまず何日もこの通路を走らせて、日によって得られる餌が変化することを学習させる。どこにどの匂いの餌が置いてあるのかもこの間に学習しているはずだ。そして、次に今度は、毎日実験にはいる前に、ある匂いのついた餌を食べさせたデモンストレーションラットと金網越しにしばらくいっしょにさせたのだ。デモンストレーションラットが食べてくる餌は、迷路の先端にある三種類の匂いつき餌のうちの一つで、しかもそれぞれの日には扉が開いている通路の先にある餌と同じだ。そしてその後で、迷路実験に使われる方のラッ

ト（この実験でのオブザーバーラットということになる）に、それまでと同様に迷路の装置を走らせ、最初の一試行目から扉の開いている通路を選択できる可能性が三分の一より高いかどうかを見たのだ。

ここまでの結果は、予測通りのものだった。ネズミは、確かに三分の一より高い確率で、最初の一試行目から正解の通路を選ぶことができたのだった。

これは、事前に匂いがかがされたことでその匂いの餌に対する食欲をそそられ、その匂いのついた餌の置かれた通路を選択したことを示している。匂いによって食欲をそそられることが功を奏したのだ。ここで、次に、ガレフはデモンストレーションラットを複数にして、それぞれのデモンストレーションラットが食べて来た餌の匂いがすべてちがっているようにしてみた。迷路の通路先に置かれた匂いつき餌と同じ匂いの餌は一種類だけその中に含まれている。ほかは迷路とは無関係の匂いだ。そして、その

一種類の餌は、やはりその日に扉の開いている通路先にある匂いつき餌と同じ匂いになっている。こうすると、オプザーバーラットはどうするだろうか。

どの匂いもオプザーバーラットの食欲をそそる可能性をもっていることにはなるのだが、自分にとって利用価値のある匂いだけに食欲がそそられたとすると、迷路を走らせた時に最初から正解の通路を選ぶ確率は三分の一よりも大きくなるはずだ。そして、この場合には、ラットが匂いの情報の中から自分にとって利用価値のある情報だけを利用したことににもなる。

この結果も予測どおりとなった。最初の試行での正解率は高かったのだ。本人(?)に利用する意志があったのかはわからない。けれども、結果的に利用したことには変わりはないだろう。いくつもの匂い情報の中から特定の匂いを情報として利用すること、ネズミにはできるのだ。

動物の行動は、時としてこんなにも思いがけないものだ。けれども、それらの動物の行動を知るにつれ、人間の行動に対して改めて考えさせられることは多い。文明の超特急に乗ったために通り越してしまった各駅の名前を忘れていくということが、私たち人間にはずいぶんあるのではないだろうか。時には、振り返り、それぞれの駅の名前を確かめることで、私たちが他の動物と同じく生き物だということ、を思い出す必要もあるのではないだろうか。核問題が取りざたされる昨今、豊かな文明の中で忘れ去られがちな、あるいはすでに気づかれもしくなってしまうような人間本来の姿を思いやることが何か、あった考え方を生んでいく効果をもってはいないだろうか。と、思う。

(聖徳大学短期大学部)

第21回OMEPP（世界幼児保育・教育機構）

世界大会を終えて

小川 清美

一九九五年八月一日から四日まで、横浜のみなど未来にあるパシフィコ横浜を会場にして、OMEPP世界大会が行われました。OMEPPという組織はユネスコやユニセフなどに助言する立場にある、子どもたちのために働く国際的な非政府組織（NGO）であり、現在六十か国以上が加盟しています。

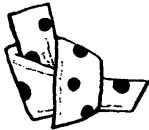
第二次大戦が終わった直後の一九四八年に第一回OMEPP世界大会が開かれました。その目的は世界の子どもたちの平和を願って始められたのです。それから約三年に一度の割合で世界大会が開かれてきました。こうして一九九五年に二十一回目の世界大会がアジア地域の中の日本の横浜で開催されたのでした。OMEPPとしてはアジアで開催するのは今回

が初めてのことであった。OME P世界大会としては四十七年目にあたります。これまでの世界大会はヨーロッパか北アメリカで開かれていましたので、アジアでの開催というのはOME Pの歴史の中でも画期的なことでした。

一九九二年のアメリカの北アリゾナ大学を会場とした大会で次の日本の横浜を会場にした大会が承認され、約三年をかけて準備して開催されたのでした。この世界大会は研究者たちによる研究発表だけで構成されているではありません。第二次世界大戦が終わってすでに五十年もたっているのに、今だに世界中のどこかに平和に暮らしていけない子どもがいるということを認識し、子どもと関わる世界中の人々が手を取り合って子どもたちの平和を守っていかうとする強い願いのもとに、海外四十四か国から約三百人の方々が、また国内からも千五百人以上の方々が集いました。このような多数の参加による世界大会はOME Pの世界大会史上、はじめてのことでした。

「いま、人間を育てる——子ども時代の充実に向けて——」

これが今回の大会のテーマです。「人間を育てる」というあまりにも当然のテーマですが、現代だからこそ敢えてこのテーマにそって考えていかなければならないとOME P日本委員会は考えたので



した。テーマについて次のように説明されています。

「子どもたち一人ひとりのおかれている環境は、国により、また個々の家庭により、多様に異なっています。しかし、どの子どもも、人間として、育てることに専念する大人を必要としていることに変わりがありません。

社会がますます複雑化し、環境の悪化が進んでいる現在、私たちは幼い子どもたちのために働く保育者、また関連する専門職として、子どもたちが本当に必要としているニーズに応える仕事と責任を問い直すことが求められています」

そして1. 現代の環境と子ども 2. 子ども時代の充実に向けて 3. 乳幼児保育・教育の質の向上という三本の柱にそって参加者の発表と討論が行われました。中でも私たちがなかなか話を聞く機会がない国々からの報告は貴重なものでした。コロンビアからはストリートチルドレンの世話を精力的に行っているニコロ神父の報告。ブルガリアの子どもの現状を報告したのはイワン・ディミトロフ氏。バングラデシュからスザンタ・アディカリさん。アルジェリアからはヌーリア・ルウマーン女史。南アフリカからはマピツォ・マレバ女史。未だ紛争中で大会寸前まで来られるかどうかが決まらなかった北アイルランドのブリッド・ルディー氏。その他にもアジアではじめての大会には非アジアの様々の国から参加して報告してほしいのでお願いしていたタイやネパールやインドネシアやインド



や中国の方々からの報告。そして日本からも日本保育学会会長の岡田正章氏の講演をはじめ、アジアで医療活動をしている岩村昇氏や阪神大震災を体験した阪神地域の子どもたちの報告が京極正典氏と市毛愛子氏からありました。これはNHKニュースでも取り上げられたのでご存知の方も多いでしょう。詳細はこれから様々な形で私たちに提示されることでしょうが本当に盛りだくさんの内容でした。

世界大会での交流のようす

OMEP世界大会には様々な交流のためのプログラムが用意されました。八月一日の夜に行なわれた歓迎レセプションには神奈川新聞主催の花火大会が色をそえ、八月三日の夜に懇親のために氷川丸でおこなわれたインターナショナルの夕べにも八百人の人々が集いました。海に落ちる夕日がすばらしく各国の交流が楽しく展開しました。八月二日の夜のプログラム、「アジア・太平洋子ども歳時記」という催しには各国の人々が自分の国の民族衣裳を身につけて披露し、とても華やかなものでした。各国の子どものいろいろな遊びや歌が披露され、学術的にもたいそう価値のあるものようです。この他にも神奈川県内の保育園や幼稚園や施設などを見学するプログラムを用意しました。担当者スタッフが、最大の努力をおしまなかったために、参加した方々には大変好評でした。さらに特に国外

の人々を対象にしたプログラムが二つありました。

その一つは特に円高の日本に来たくても来られない人々に宿泊施設を安価で用意することでした。これにはたくさん保育園や幼稚園が協力して下さいました。つまり、お寺さんの保育園では寺の部屋を安く貸して下さいたり、幼稚園のホールを貸して下さいたり、お知り合いの宿舎を安くして下さいさったり、ご自分の家をホームステイとして貸して下さいたりという善意によって実現することができました。実際には利用していただきたい方はVISAの取得に時間がかかったため、なかなか予約できず、スタッフは大会寸前まで、そして大会中ももちろん利用者たちのお世話をして下さいましたのです。

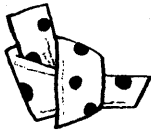
二つ目としては世界大会終了後、日本の人々ともっと親しく交流を深めるために二〜三泊程度の小旅行が計画されました。以前OMEPドイツ国内委員会が日本に対して招待して下さいたことがあるのでその際にお世話になった人々を中心となって快くホストファミリーを引き受けて下さり、これもまた参加者たちは大変満足してそれぞれのお国へ帰られました。ほとんどの人が保育者であったり、保育者を養成する立場にあるので共通の話題も生まれやすく交流もスムーズだったようです。このプログラムには特にスウェーデンやデンマーク、カナダやギリシャの方々が多く参加されました。日本の大都会ではなく、地方の小都市に希望が集中していたのが印象的でした。参加された方々は本当に積極的に関わり、本当に遠い遠い国であった日本を楽しんでいらっしやっただと思っっています。単

に日本委員会が御ぜん立てした計画におとなしく乗るのではなく、自らの意志を常に持っている海外の方々のパワーを私たちも少しは学ばなくてはいけないと感じたりしたのでした。

この他にも「横浜人形の家」では世界大会にあわせて特別展示として「人形・おもちゃが語る日本人の子育て」展を開催し、延べ三万人もの入場者を迎えました。そして横浜美術館でも「世界子ども美術展」として世界の子どもの絵や阪神大震災を受けた子どもたちの絵、この世界大会のロゴマークを製作して下さった和久洋三氏所蔵の子どもたちの立体作品などを展示し、約千人以上の入場者を迎えました。

パシフィコ横浜の会場の中でも目で見るプログラムが用意されました。各国から様々な保育などの様子をつつしたVTRを持ってきていただいて、VTRショーをしたところ参加者からは大変好評でした。話を聞くだけでなく、映像と音とが同時に動くVTRは魅力ある存在だったようです。また各国から保育事情をパネルに提示していただく展示コーナーも盛況でした。ここではゆかたの試着コーナーや折り紙コーナーやお茶席などもあり、討議などで疲れた方々にはとてもリラックスできる楽しいコーナーでした。まさに国際交流の場そのものだったのです。

楽しい所といえばバザー会場も満員でした。それぞれの国から小



さな手みやげを持ってきていただき、その品物をバザーで売り、売
り上げは開催国の委員会とOME P世界理事会の両方に寄付するこ
とになっています。たくさんの品物が飛ぶように売れていきまし
た。

これらのプログラムが四日間の大会とその前後に計画され、実際
に実施されたこと、しかもどれもが参加者に喜ばれたことは、ス
タッフたちの努力と忍耐の賜物だったと思っています。

世界大会を終えて

大きな会場でたくさんの人が集まり大盛況であった世界大会が本当に終わって、ほっと
するのは閉会式でOME Pの旗を次に開催する国にお渡しした時なのです。舞台の上には
ほとんど会場に入れず、裏方に徹したスタッフ達も並び、参加者からの暖かい、心からの
拍手と「ありがとう」ということばを聞いて、自分たちの努力が実ったのだと実感するこ
とができました。

この世界大会のプログラムが充実したのになったことや大会運営がスムーズに行われ
たことには、実はたくさんの団体や人々が協力したからなのだとことを忘れてはなら



ないと思います。それぞれの担当をそれぞれの団体の方々がしっかりと遂行したからこそ世界大会が成功したといえるでしょう。幼稚園とか保育園のワクを越え、さらに宗教も越え、これまで一緒に顔を合わせることをさえなかった、様々の団体や人々がOMEP世界大会のために何度も会議をして、理解を深め、ひとつの大きな課題をやりとげることができたのだと思います。これができたのはOMEP日本委員会の会長である津守真先生の毎回の会議のはじめのあいさつにあったのではないかと考えています。津守先生ご自身もすでにいろいろなところで書いていらっしゃるように、「なぜOMEP世界大会をするのかというそれは世界平和のためなのである」ということであり、この考えがスタッフたちの信念となっていたのではないかと思っています。

次回は一九九八年八月八日から十七日までデンマークのコペンハーゲンで開かれます。二十一世紀を迎えるためのたいせつなコンファランスになりそうです。

(埼玉純真女子短期大学)

震災後の子どもたち(4)

地震と絵本づくり

忘れもしない一月十七日午前五時四十六分、突然、神戸を中心に襲った阪神大震災は自然界の恐ろしさをまざまざと叩きつけ、多くの人々の上に恐怖と不安を残した。悲しいかな震源地である神戸市内の保育園では人的・物的に相当の被害を被り、平常保育の続行が非常に困難となった。

神戸市内の公私立保育園、合わせて百五十八か園中、園舎の被害状況は柱・壁等の一部破損が百十八か園。全壊・半壊が十三か園となった。その内、七か園は全面建て替えが必要となるが代替施設の確保が困難なため、再開できるのは早くとも三年はかかると予測される。震災後、十七日経っ



箕浦 志保

た時点で保育開始が九十八か園と全体の六十二％であるが、中には園舎が破損したり、また避難所となっていることから保育不可能園が六十か園ある。

震災直後、転入して来た子を緊急入所児というが、神戸市では再開の目途が立つまでの間、公立の交流も含めて被災者が他の保育園に入園する希望があれば、定員の十五％増まで受け入れ、保育を行う制度を打ち出した。

私どもの学が丘保育園（定員百五十名）は垂水区にあり「やや被害のあった地域」となるが、外壁のひび割れが著しいにも関わらず他園から緊急入所児が三十名入って来て、一挙に百八十名に脹れ上がった。そこで、急ぎょ園庭に仮設教室を建て保育を行ったが子どものあそび場である園庭が非常に狭くなり、運動会ができるか否かが心配となる。一方、保育者の加配が必要となり、急ぎよパート保育でまかなう。

震災直後の乳児の行動

二歳の緊急入所児A夫は毎日激しく泣き、指吸いがひどく昼食も殆ど食べようとしない。お昼寝時にカーテンを閉めると急に激しく泣き続ける。

A夫の家庭は被災の最も大きい灘区に家を新築した所へ地震が起き、新しい家は崩れローンの返済のみが残り、母親は働きに出ていた。

二歳の在園児B子は登園時、母親に抱かれたまま泣き続け離れない。保育中は保育の身体の一部に触れたまま離れようとしない。

B子は親子三人寝ていた所へ天井が落ち、二時間後にかろうじて救出されたのだった。

○、一歳児の在園児の場合は地震後、殆ど眠っていたせいか恐怖をさほど感じず、震災前とあまり様子は変わらない。

震災直後の幼児の行動

四歳の緊急入所児A子は登園時、父親の胸に抱

かれて終始激しく泣き続ける。

看護婦である母親が震災直後、A子を父親に預け被害の最も大きい灘区へ仕事に出かけたが、交通渋滞で帰宅できず職場で寝泊まりする日が続いた。面倒を見ていた父親も一日も早く仕事に復帰しようとする姿をA子は察知して母親のように帰らないのではとの不安があった。また、同居している障害を持つ叔母が地震時パニック状態に陥った姿をA子は見ていた。以上の三点が原因となり、A子の精神状態が一層不安定となっていったのである。

一週間後、母親に手を引かれ登園して来たA子は門柱にしがみつき、「ママ行かないで」と泣き叫ぶ。

保育者は、A子の気持ち落ち着くまで母親が

家庭で面倒を見るよう勧めた。

一週間後、A子はやっと笑顔で登園した。その三日後に熱を出し欠席したが、その後元気に登園するようになった。

五歳児にもなると、震災後、余震がある毎に



▲登園時 泣き叫ぶ子どもを受け入れている

「今、何度？」と不安気に聞きに来るが、慣れるに従って友達同士で「今、何度やで」と震度を言い合っていた。

精神的に未熟な子どもは大震災の恐怖に直面したことや恐怖がとれないまま他園に緊急入所させられたことで、心の痛手が予想以上に大きく極度の情緒不安定を起こし、必要以上におびえる、指吸いがひどい、ちょっとしたことでも泣き出し激しく泣き続ける、しがみついて離れない、保母に身体をすり寄せ異常なまでに甘える、なかなか寝つかない、表情もなくぼうっとする、昼食を殆ど食べようとしない、園庭に出て遊ぼうとしない等の症状が現れた。これらは幼児期に非常に強い恐怖体験を受けたことよって起きる、心が混乱した状態と言えよう。

保育者や保護者が、心の余裕をもって惜しみない愛情を示し、子どもの声に耳を傾け、よく話を

聞いてやり、精神的支えとなる対応をしたことで、やがて子どもの傷ついた感情が癒され、平常心に戻っていった。

絵本づくりで心の復興を

私も学が丘保育園では昭和五十九年から毎年一冊ずつ子どもたちと絵本づくりをして十六冊の絵本を出版した。

地震後、これらの経験を生かして『おこったなまず』の絵本づくりに取り組んだ。

その理由は、地震によって子どもたちが受けた心の傷を一日も早く癒すために、地震の思い出を避けて通るのではなく、これらを題材にして思い出を吐き出させ昇華していくことが重要だと考えたからである。

ところが、『おこったなまず』の絵本づくりの構想を練り始めたはいいが、これまでの絵本づくりと違って震災直後の混乱状態の中で、にわか

つくる絵本の構想は、そう簡単に思い浮かばず、夜を徹することもしばしばあった。

『おこったなまず』絵本の内容

自然の豊かさの中のんびり畑仕事をしていた主人公じろべえは、ある日スピードを上げて走って来た車に追い越され「車が欲しい」と思い、その後、車を買って走りました。次に、狭い道を広げ、山を掘ってトンネルをつくり、車がスイスイ走れるようにしました。ところが、野原に住むワシやヘビの神様の怒りを受けた。それでもこりずに、じろべえは池を埋め、ビルを建て文明の便利さだけを追い求めていった。

ついに、じろべえは島と島を結ぶ橋を架けようとした時、つい間違えて池に眠っていたなまずのしっぽと島を結んだ。その時、突然なまずが暴れ出し、大地震が発生した。じろべえは車と一緒にビルの下敷きとなり、かろうじて助かったもの

の、涙を流しながら自然をいためつけたおろかさに気がついた。

以上のストーリーを四、五歳児に語り聞かせた後、体験学習に出かけた。あらかじめ、バス会社に行き先を指示しておいたので、三の宮の倒壊した傷だらけの町並を見ることができた。子どもたちは「ウワー、ビルがいっぱい倒れてる」「下敷きになってじろべえが死んだんや」と各々が地震の恐怖を語り合っていた。その後、絵本の中に登場するワシやヘビのいる王子動物園を見学し、なまずのいる須磨水族園にとバスを走らせた。いずれも園長さん自ら動物の習性について、分かりやすく説明がなされた。子どもたちは「ワシが怖い顔して怒ってる」とか、なまずを指差しては「なまずのしっぽを引っぱったから地震が起きたんや」と言いながら、実物と絵本のストーリーをだぶらせていった。



▲こうそくどうろがこわれてきゅうきゅうしゃがきている

興奮冷めやらぬ頃、子どもたちは、いともスムーズに絵本づくりに取り組んだ。そこには、実際に体験したことにより、内容が子どもの心の奥底に浸透し、親しみを増したからであろう。無心になって絵本づくりをする子どもたちの姿から、い



▲おうちでねているときにじしんがきたよ

つしか心の動揺が整理され、次第に落ち着きを取り戻していった。一つひとつの絵には自分自身の心を復興させていった子どもの生きる力が息づいている。

四月十三日の早朝、仕上げた原画と原稿を抱え

絵・学が丘保育園児

東京の出版会社に向いた。折しも東京駅は地下鉄サリン事件の真っ最中で、物々しいアナウンスの声に人々が足早に去って行く。

その中を予約していた出版会社を走り廻り、やっとフレール館と契約を交わした。ほっと胸を撫で下ろす間もなく最終列車に飛び乗った。

それから二か月半が経った頃、園庭で遊んでいる子どもたちの前に、出版された絵本二千冊を積んだ車が入って来た。子どもたちは我れ先にと車を取り囲み、「早く見せてよ!」「絵本が本当に出来たの?」と期待と不安の面持で見つめている。敵かに一冊の絵本を取り出すと、「ワーツ」という

歓声と共に「僕にも、私にも」とかわいい手が差し出された。絵本を手にした子どもたちは、さも大事そうに滑り台の上で見る子、ブランコに腰かけて見る子、砂場でしゃがんで見る子等、思い思いの場所で、思い思いの格好で絵本に見入っていた。「僕の描いたなままず載ってる」「このへび私が

つくったんやで」と言っは、わざわざ見せに来る子、「○○ちゃんのつくったワシが載ってるよ!」と大声で知らせる子等、どの子の顔も明るく生き生きと輝き、自信に満ちあふれていた。その姿からは地震で受けた恐怖心など、消え失せていた。

自分たちの描いた絵が一冊の絵本になったことで子どもたちはこれまでに増して一段と、たくましく成長していったように思う。絵本づくりに関わった保育者たちも、それらの姿に感動をおぼえ、絵本づくりが子どもの心の復興になったことを実感した。

その後、震災で受けた保育被害状況と、子どもの心の傷を癒すためにつくった『おこったなままず』の絵本を盛り込み、「阪神大震災が保育に与えた影響」と題して論文にまとめた。折しも開かれた日本保育学会や世界幼児保育・教育機構大会で発表を続け、同時に絵本の原画も展示した。その

ことでは日本はもとより世界の幼児教育者者までもが興味、関心を示されお土産にと購入された。これら『おこったなまず』の絵本を大震災を体験した日本の子どもはもちろん、アジアの子どもたちにも是非、読んでもらおうとプレゼントした。その後、台湾、バン格拉デシユの先生からお礼の電話が入り、同国の子どもたちが今、その国ならではの素材を使って『おこったなまず』の手づくり絵本をつくっていると聞く。どんな絵本が送られて来るのか楽しみに待つこの頃です。

一方、『おこったなまず』の絵本を購入された、瀧弘二さんという方が絵本のストーリーに曲をつけて送られて来たのには感動した。十月七日に開催する運動会では、四・五歳児八十七名が『おこったなまず』のリズム表現をし、その中で瀧さんの作曲された歌を歌います。当日、珍客として台湾から張園長先生初め、作曲された瀧さんも来園され、震災の被害に合った私どもの子ども

たちを励まして下さいます。

当園の子どもが手づくりした、たった一冊の絵本を中心とした保育の交流が今まさにアジアに広がろうとする中で、アジアは一つという感を新たにする思いである。

(学が丘保育園・

神戸アジア保育交流会)



ある日の育児日記から

(61)

佐藤 和代



り、光ったり鳴ったり、いやになるほど。かくて、狭い子供部屋はパニック。有の熱意に負

種類が多いの? アニメは毎年新番組になって、ロボットや武器がたっぷり出てきます。それを全部覚えた頃には「新ロボ登場!」なんてね。おもちゃだってそのたび出るし、変形したり合体したり、

有が、幼児雑誌の中で一番好きなページは? 答・おもちゃプレゼントのページ。まったく、雑誌を見てもテレビを見ても、おもちゃが出てくるたび「あれ買って!」とやかましいこと。だいたい、男の子のおもちゃって何でこんなに

息が出る。アニメ文化のせいにしちゃいけないのかしら、親の姿勢の問題かしら。

選んたいいおもちゃだけ買って、手づくりの抱き人形なんかも並べて、かわいくかつ上品な子供部屋、なんて夢見ていたのに。現実との落差にタメ

けたおじいちゃんが買ってくれたり、おみやげにもらったり、誕生日に買ったりで、おもちゃを踏み分けて歩く状態。 どうしてこうなるの? 私だってかつては、敵



有の最新おもちゃは、4層りに変身するロボット。かたときもはほせない。

とにかくもうアニメおもちゃは増やさない、と、「買って」コールは「誕生日にね」で片づけれます。有はまだ、誕生日が年に一回しかないとは気づいていないようなので...

差し出された十円玉



永野 むつみ

この夏、都心の人形劇場で公演をした。日本児童・青少年劇団協議会創立二〇周年記念事業、七〇劇団一挙上演という企画への参加。観客は、子ども劇場、親子劇場など鑑賞団体を中心に全国各地からおいでいただいた。私たち人形劇団ひばぼたあむは、

S・G・コズロフ作・田中 潔訳『ハリネズミと雪の花——新年の前の日はなし』で、二日間、三ステージの公演だった。

最後のステージが終了して、私はいつものように

出口へ立ち、観客を見送っていた。すると、五、六歳の女の子がひとり近づいて来た。差し出された手のひらに十円玉がのっている。

「客席に落ちていたの？」

尋ねると、じっと私をみつめたままかぶりを振り、さらにぐいとき出した。

「……もしかして、それ、私にくださるの？」

女の子は黙ってうなづいた。私は、思いもかけないプレゼントにおどろき、胸がいっぱいになった。

お名前を聞くのを忘れたほど。

どうして十円玉なのだろう——。それはそれとして、とてもうれしい。観劇の思いを託し、私に何かくれたかったのだろうか。とりあえずの「気持ち」を手渡して帰らなかったのか、その率直さにくれた。同時に、その日の出し物の影響をそこにみてとるのは、深読みだろうか。

ちなみに『ハリネズミと雪の花』のあらすじは次のとおり。

新年の前の日、くまは高熱を出して寝込んでしまふ。病気を治すことができるのは「たのし草の花」だけだと聞き、親友のハリネズミは、森へ飛び出して行く。これまで誰も、見たことも、聞いたこともない魔法の花を探すために。途中で出会った「はこやなぎ」「とねりこ」「松」の助けによって「ハリネズミ」は、冷たい泉の底に花をみつける。何度も潜り花を探ろうとするが、しだいにハリネズミは凍っていく。一九六〇年代あたりまでのドラマならば、

死ぬまでハリネズミは花を探り続けました——という展開になるかも知れないが、九〇年代のひぼぼたあむのハリネズミは「このままだと自分も死んでしまう」と、探るのを断念し逃げてしまう。しかし、木々たちの力（これは魔法の力としか言いようがない）によって、ハリネズミはくまの元へ帰り着く。凍りついたハリネズミに「たのし草の花」を抱いたくまは、熱が下がり病気は治ってしまう。同時にハリネズミも解け、みんな揃って新年をむかえるという話。

とりあえずできることを

ハリネズミが木々たちに助けを乞い、助言を得たとき、彼は必ずこう言った。

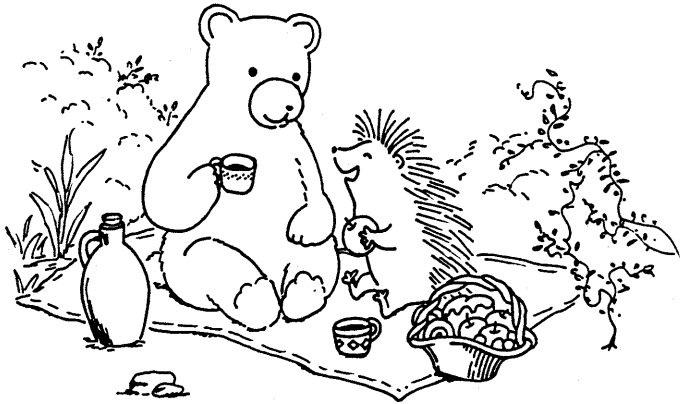
「ありがとう。そうだ、ぼくにしてほしいことはなに？ もしたのし草の花をみつけることができたら、ぼくは、きみのためになんでもする」

すると、寒さの中でふるえながら、ひとり立っている。「はこやなぎ」は、自分の根元に雪をかき集めて欲しいと言う。そうすれば少しは暖かくなるだろうからと。ハリネズミは応える。

「そんなことなら、ぼくは今でもできるよ」

本来なら急いでいるはずのハリネズミが、出合った木々たちと誠実に、そして確かに、関係をきり結んでいく。完璧主義とは対極の、ありあわせの、しかも精いっぱいのある方で。そのつど、できるやり方で、できることをしていくハリネズミの生き方は、しなやかで、したたかだ。人と人との出会いとは、本来こういうものであったか。

このエピソードが、先の女の子の十円玉のプレゼントに直接に影響したのかどうか確かめようがないが、ああ、このドラマはそういうドラマでもあったのだと、少なくとも私は気付かされた。私はしばしばこんなふうに、観客によって脚本の読みとりを深められている。



山根 恵子・画

ありがとう「十円玉」さん。

ふいをつく一言

けいこ場ではあいまいだったことが、上演し、観客に観てもらってはつきりするということは、私個人に限らずよくある。とりわけ子どもたちの反応や、何気ない一言は、ふいをつく。おどろくほどの確で、「全て持って」生まれてきているのではないかと思わせるものがある。

またむすこの例で恐縮だが、彼らは私にとって大切な観客のひとりであり、ディスカッションし易い立場にあるので許して欲しい。

脚本が配られ、ハリネズミの役を振られた私は、健気なハリネズミの生き方に共感もしたが反発もあった。「私なら採りには行かないよ」と、むすこたちの前で言い切った。すると当時中学生だった長男は「本当か、本当にアンタ行かないで居られる

か」と私に言ったものだ。この問いかけに、まだ私は答えを出し切れていない。五年経った今でも揺れている。揺れているからそのつど新しく演じるしかない。開き直って言えば、これでいいと思っている。すでにわかっていること、わかり切っていることを舞台上演って意味があるのだろうか。ある種の、児童むけと言われる演劇や図書のつまらなさの原因のひとつは、ここにあるのではないか。演劇で説くことはない。問えばいい。私たちはこう思うが、キミたちはどう思う？ おとなだって何もかもわかっている訳ではない。わからないことがあるから生きていておもしろい。大人はもっと堂々と同じ悩める仲間として子どもたちの前に立っていいと私は考える。

観客に支えられて

初演を観た当時小学一年生の次男が言った。

「よかったねお母さん、くまくんに助けてもらって」

私は、頭をガツンとやられた気がした。長男とのやりとりでもわかる通り、見たことも聞いたこともない花を、ひとりで採りに行くというストーリー展開に心を奪われがちであった私は、大切なことを見逃していた。そうなんだ、次男の指摘通り、このドラマは、くまによってハリネズミが助けられるドラマでもあったのだ。高熱のくまに抱かれることで、凍っていたハリネズミが解け、生き返ることができたのだから。

考えてみると、私たちの暮しの中では、誰かが誰かを一方的に助けるなんてことはあり得ないのだった。障害者の場合も高齢者の場合も、一見、お世話する人とされる人とが役割を固定して担っているようにみえて、その実、お世話する側が、そのことで、自分の値打ちに気がついたり、人生についての哲学が洗い直されたりするなど、逆に支えられてい

るということはままあることだ。

私は子どもたちの、演劇を観る力を信じる。自分の観客の大部分が子どもたちだということに、畏れと誇りをもっている。

ありあわせの言葉で

『ハリネズミと雪の花』を観てもらったある幼稚園のできごと。

上演が済んで片付けをしている私たちのところへ、年長児クラスの女の子がやって来て言った。

「おもしろ……ううん、さびしい人形劇、また観せてね」

居合わせた主任の先生が、私たちへの気遣いからか、

「あらあら、さびしいじゃないでしょ……」
とたしなめられた。

「いえいえ、大丈夫です。わかります」

と先生の次の言葉をおしとどめ、

「ありがとう、またね」

と言うと、女の子は、ありがとうと言葉を残して立ち去った。

おもしろいと言いかけて、さびしいと言い直した彼女の思いがよくわかる。おもしろいという言葉ではなくくりたくないものが、彼女の内側にあったということだろう。もっと他の言い方を、と考えたとき浮かんだ表現がさびしいという言葉で、もし、もっとたくさん言葉をもっていたら、ちがう言い方をしたのかも知れない。さびしいという言葉は通常の意味を越えている。けれども、わざわざ言いに来てくれたこと、わざわざ言い直したことなどから、かえて彼女の高まりは伝わってくる。しかし、彼女は満足しただろうか。もっとしっくりくる言い方はないかしらと思っただろうか。できればそうであってほしい。ありあわせの言葉を駆使しながらも、もっと的確な表現をと求めることで人間は、自分の

表現に言葉を豊かにしてきたのだろう。伝えたい相手と内容がなければ言葉は生まれない。

ぜひ、ありあわせの言葉だけでは表現できない——と思わせるような人形劇でありたいものだ。

感想をひき出す

観客、とりわけ子どもたちの感想、意見を受け取るのはむずかしい。私たち劇団の仕事は、いわば種まきの仕事で、耕すことと育てることには直接には関われない。まいた種の行方に責任をもてないとは、はなはだ心細い仕事をしている。かろうじて、子ども劇場、親子劇場などの鑑賞団体とは、事前、事後の取り組みをしてディスカッションの場を創る努力をしているが、幼稚園、保育園とはなかなか機会がもてない。たまに子どもたちの感想文や絵などを送ってきたる園もあるが、私たちの側にそれを読みとる能力がないと、記録や記念の品という意



▲かっこうの卵とくまの子ティムチョ

味あいでしかなくなる危険性がある。それに、観劇後、一律に感想を言わせたり、絵を描かせたりするのはどうかと思うし、やはりじっくり、親や保育者に見守って欲しい。そして、できればなんらかの形で劇団の方へも伝えてもらえれば、私たちの仕事も、よりの確になっていくにちがいない。問題は、親や保育者に子どもの思いを引き出し、受けとめるセンスと技術があるかどうかということ。また、それらを伝えてやりたいと思わせる魅力が劇団にあるかどうかということではないか。

釈迦に説法

繰り返しになるが、子どもたちはありあわせの言葉で表現する。その言葉自体がなまじ意味をもつだけに、受け手は振り回されてしまいがちだ。本当は何を言いたいのか、前後の脈絡、気配、表情、姿勢、言い方、状況など丸ごと受けとめなければ子ども

もの心は把めない。しばしば悪気なく、とんちんかんな解釈をしてしまうことがある。これは対子どもに限らない。コミュニケーションとは元来そういうものだ。おとな同士だって同じこと。好きという言葉で大嫌いという内容を伝えることができる。こんなことは日常の暮しの中でよくわかっていることだ。

たとえば、駅で子どもが転ぶ。親が怒鳴る。「何してるの！」

尋ねるまでのことではない。転んだのだ。見ればわかる。しかし「何してるの」なのだ。翻訳すれば、

「ぼやぼやするんじゃないの」であり、

「しっかり歩きなさい」であり、

「折角のよそいきが汚れてしまったでしょ」

「電車に遅れるじゃない」かもしれないし、

「私だって疲れてるのよ」かもしれない。

「アンタはいつだってこれなんだから」というものもあるかも知れない。「何してるの」の一言は、実に豊かな内容をもつ。演劇のセリフはここによりか

かっている。

脚本に描かれた「何してるの」の一言をどう言うか。どんな内容を含ませて発するか、俳優は腐心する。観客は創造的想像力をフル回転させて受け取る。「何してるの」の一言がどんな意味をもっているか感じようとする。さながら、出合ったばかりの恋人の、一挙一動を見守るように。言い換えれば、人間への興味がなければ演劇は楽しめない。演劇は人間への興味をかきたてる。結果として、人間をみる目やコミュニケーションのセンスも育ててくれる。演劇と子育てはとても似ている。いい俳優がいい保育者になれるとは限らないが、いい保育者はいいい観客になれる。ぜひ、子育てに関わる全ての人々に、もっと演劇に触れて欲しい。できれば観るだけではなく演じることも、脚本を書くこともすすめたい。いい保育者はいいい俳優に、いい脚本書きになれる可能性をもっているはずだから！

(人形劇団 ひぼぼたあむ)

中国のむかしばなし

『丁ばあさんと「年」』

近藤 伊津子・編

中国の人々はお正月に爆竹を鳴らし、門には赤い紙を貼り、赤い服を着ました。たくさんの餃子を作りごちそうにしました。

それにはこんなはなしがあります。

むかしむかし、ある村に丁ていというばあさんがいました。

いよいよ明日むた、お正月という大晦日のことです。

村の衆はひとり残らず、この丁ばあさんの外ほかは、山の上へと逃げてしまいました。

丁ばあさんだけ残った村に、ひょっこりと見すばらしい老人とじやうがやってきて、喰いものを恵んでくれるよう乞いました。食べ残しの餃子をよろこんで食べて、だれ一人として村にいないのはなぜかとたずね

ました。

丁ばあさんは、実は……と、そのわけをはなしました。

それは、こういうはなしです。

「年」という世にもおそろしい緑色の鱗におおわれた怪物が、もうすぐにこの村にやってくる。そして、人間を腹一杯喰い殺してしまうこと。あたりは潮が満ち、洪水になってしまうこと。

この「年」は、一年のうち三百六十五日は深い海の底に住みついており、その年の終りの日に、海から出て来て、満腹になるまで、人を喰い、お正月の朝、海に帰っていくこと。

そして、去年、丁ばあさんの一人息子が、「年」に喰われてしまったので、今年、仇打ちをどうしてもしなくてはと、居残った、とはなしました。

わけを聞いた老人は、

「よし、その怪物を退治してやろう」と云い、丁ば

あさんに、赤い紙と布を用意させると、あとは、餃子の餡をたくさん作るようさしずしました。

老人は、門の上に赤い紙を貼り、腰に赤い布をゆわえ、自分の竹の杖を火にくべました。

竹の杖はいきおいよくはじけ、

「ピピババピー」と、燃えあがり、丁ばあさんの餃子の餡を刻む音が、

「トットトットトット……」と村中にひびきわたった丁度その時、「年」があらわれました。

「ピピババピー」

「トットトットトット……」

と、けたたましく鳴りひびく村にやってきた「年」は、門の赤い紙と、老人の腰の赤い布がまぶしくて、目を開けておれなくなりました。その上、

「ピピババピー」

「トットトットトット……」

「ビババビバ」

「トットトットトット……」

と、絶えまない音に「年」はおどろき、あわてふた
めき、深い海の底に逃げてしまいました。

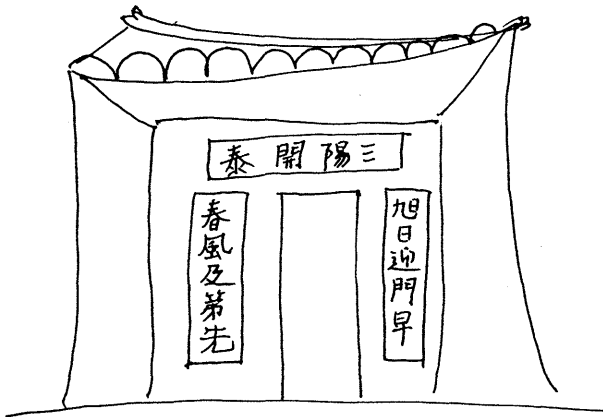
翌日、元日の朝、もどってきた村の衆は、丁ばあ
さんが生きているのを見て、びっくりしてしまいま
した。

丁ばあさんはわけをはなしました。

それからというもの、人々はお正月になると、餃
子を作り、赤い紙を門に貼り、赤い服を着ている
と、「年」という怪物が出てきても、人も喰わずに
逃げてしまうと信じるようになりました。

おしまい

(かっこう文庫主宰)



聯と対联

むかし……赤い紙と赤い服

いま……赤い対联・赤い聯と新しい服

編 集 後 記

明けましておめでとうございませう。今年も幼児の教育をめぐる事柄を探り、考えていきたいと思ひますので、よろしく願ひ致します。

一九九五年は、戦後五十年という節目の年でした。阪神大震災、一連のオウム事件と先行きに不安をかき立てられることの多い一年でした。年が新たになつても、これらのことはおそらく本質的に解決していません。希望は、少しでも明るい希望に向かつて子どもと共に歩んでいくためにどうしたらよいかを考えていきたいと心しています。

今月号の保育現場からの記事に、保育者集団の在り様のことが書かれ

ていました。保育者がお互い対等に向かい合い、話し合うことの重要性を私も強く感じます。それぞれ違ふ人がいるからこそ保育者集団も豊かであるとお互いが認めあつてい

る。そのような土壌の中で育つことが、子どもが民主的で対等な人間関係を作り出していくためのひとつの明るい希望ではないかと考えます。(田)

*

今年表紙をいわむらかずお先生にお願いしました。三匹の動物たちが「なにかありそうだ」とこちらへ向かつてかけてくるところです。毎月、色を変えて一年間登場します。本文の方も、読者の方々に「なにかありそうだ」と期待して手に取っていただけるように、今年もがんばりたいと思つております。一年間、よろしく願ひします。(A)

幼 児 の 教 育

第九十五巻 第一号

(一九九六年一月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成八年一月一日

編集兼発行人 田代 和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二―一―

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五―二―

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六―一四―九

☎〇三―五三九五―六六〇四

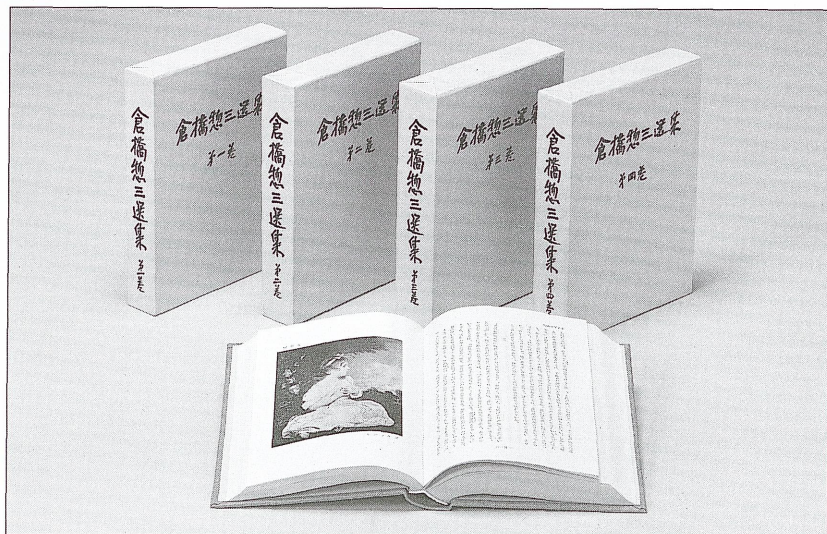
振替 〇〇―一九〇―二―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」に願ひいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

倉橋惣三選集

上製本各巻ケース付き 1~4巻 B6判 416~472頁



わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・随筆などを集大成した定本です。今でも保育界においては読まれ、語り継がれて保育者にとっては座右の書。

-
- ① 幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル 定価3,000円(本体2,913円)
-
- ② 幼稚園雑草 定価3,000円(本体2,913円)
-
- ③ 育ての心・就学前の教育他 定価3,000円(本体2,913円)
-
- ④ 保育案他 定価3,000円(本体2,913円)
-

第5巻は、平成8年3月出版予定

キンダーブックの
フレーベル館

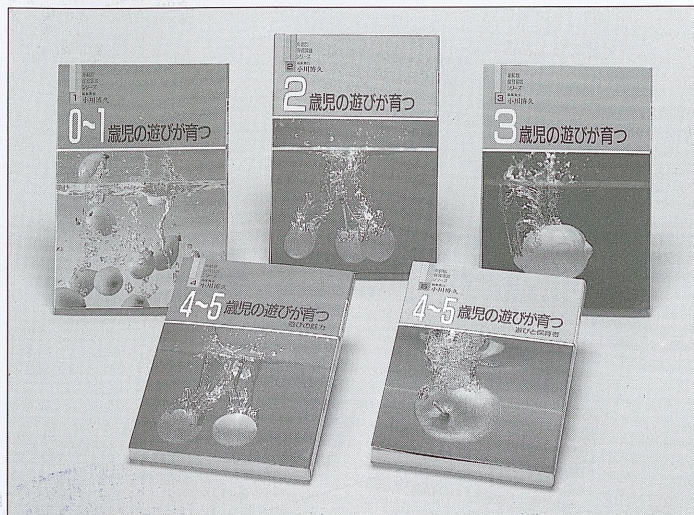
年齢別保育実践シリーズ

小川博久 編集責任 全5巻

A5判 1～4巻 264頁 5巻 288頁

全3巻セット (第3巻～第5巻) セット定価 6,000円 (本体5,826円)

全5巻セット (第1巻～第5巻) セット定価10,000円 (本体9,710円)



新教育要領が望んでいる自主性を育てる
保育に必要な援助の仕方と
子どもを見る目を養う保育実践書。

①0～1歳児の遊びが育つ

小川清実 編 定価2,000円 (本体1,942円)

②2歳児の遊びが育つ

野本茂夫 編 定価2,000円 (本体1,942円)

③3歳児の遊びが育つ

平山許江 編 定価2,000円 (本体1,942円)

④4～5歳児の遊びが育つ—遊びの魅力—

河邊貴子・戸田雅美 編 定価2,000円 (本体1,942円)

⑤4～5歳児の遊びが育つ—遊びと保育者—

河邊貴子・戸田雅美 編 定価2,000円 (本体1,942円)

キンダーブックの

フレーベル館